

2015 年度森基金成果報告書

「実写映画理論との対比によるアニメ映画理論の構築」

政策・メディア研究科修士 1 年

学籍番号 81524136

ログイン名 tyka0528

氏名 井上 玲

1、はじめに（本研究について）

本研究はその目的としてアニメ映画理論の構築を設定している。その構築の足がかりとして先行メディアである実写映画理論との対比を設定している。また、本研究で「アニメ映画」とするものは特別な断りがな
い場合には、セルアニメーションもしくはセル風デジタルアニメーションを指し、人形アニメーションや静物アニメーション、3Dアニメーションは基本的に対象とはしていない。もちろん近年見受けられるセル風デジタルアニメーションでの3DCGの部分的使用に関しては、あくまでも主要な構成要素としてのセル風デジタルアニメーションという形式を尊重して「アニメ映画」として取り扱う。

実写映画理論並びに実写映画は多くの点でアニメ映画に影響を与えてきた。それは多くの場合、実写映画と比べた際に劣ったものという扱いであった。そのため、アニメ映画は実写映画理論の文脈の中で無視されてきた。こういった問題点は既にレフ・マノヴィッチの『ニューメディアの言語』などで指摘されている。しかし、レフ・マノヴィッチなどが示唆する方向性もまた問題をはらんでいる。

レフ・マノヴィッチは映画理論が厳密には実写映画理論のみとなっているという問題点から、今後は実写映画やアニメーション、3DCGを包括した「動画理論」への転換を呼びかけた。これは映画理論が歴史の中で培った「記録性」神話のデジタル技術による変質が主な理由となっている。しかし一方でレフ・マノヴィッチに端を発するこういった主張は、アニメ映画（特に日本）が「記録性」を主眼とした実写映画の中で独自の発展を遂げ、さまざまな作品を生み出してきたという成果を「動画」というより広いジャンルに包摂することにより、不可視化してしまう危険性をはらんでいる。

特に1980年代以降にアニメ映画に見受けられる写実的で、現代的、現実的モチーフについて取り扱った作品群の「記録性」なきメディアでの芸術的達成は、今後の映像作品全般にとって重要な観点となりうるもの

である。本研究はアニメ映画における無視され、不可視化されつつあるメディア芸術としての可能性やその発展に目を向け、その達成や成果をアニメ映画理論として構築することを目的としている。

2、本年度の成果

本年度の成果としては、アニメ映画に対してメディア理論研究として本格的に扱ったトーマス・ラマールの『アニメ・マシーン』や初期のアニメ映画理論を取り扱った文献を基に理論構築に向けての下地を整えることが出来た。また実写映画理論との比較を通じてのアニメ映画のメディア的特徴、つまりは絵によって構成されているという点から見出される実写映画との相違や特性を考察した。それらの成果を基に、絵によって構成されている漫画理論研究への接続性を見出すことが出来た。

また、何よりも森泰吉郎記念研究振興基金研究者育成費の採択を受けたことにより、日本のアニメ映画作品をほぼ網羅的に鑑賞することが出来たために日本におけるアニメ映画の変質に貢献した可能性が高い作品群を見出した。もちろん実写映画に比べて作品数が少ないアニメ映画を日本国内限定であったとしても網羅的に考察の対象に加えられたことは本研究において重要な研究の下地であり、既存のアニメ作品を対象とした社会学的観点の研究やメディア史的観点の研究と比較した際の研究における射程としての幅を確保することが出来た。

その中でも特に本研究に重要となってくるのが、児童向けに制作されたアニメ映画の一群である。そもそもアニメ映画は実写ではないという点において子供向けに制作されることが初期のアニメ映画から見られる特徴である。しかし、80年代を皮切りに子供向けの教育目的での制作が行われるようになる。一般的には戦争を題材にした『はだしのゲン』（真崎守/1983）や『火垂るの墓』（高畑勲/1988）が知られているが、それに先行する形で『対馬丸 さよなら沖縄』（小林治/1982）や自然災害である『伊勢湾台風物語』（神山征二郎/1989）など多くの作品が制作されている。これらの作品で興味深いのはいずれの作品も旧来的なアニメ映画に対する写実的なモチーフ（ファンタジー、SFではない）が見られ作品群であり、こういった児童の教育目的の作品群はこれ以降も障碍児童といじめを取り扱った『五等になりたい』（加藤盟/1995）や第二次世界大戦終戦直後の北方四島を舞台とした『ジョバンニの島』（西久保瑞穂/2014）

のように現在にも続いているジャンルである。これらの作品群はこれまでの先行研究ではほとんど指摘されていないにも関わらず、アニメ映画全体の変質を体現したジャンルとして本研究で取り扱える成果である。

3、 今後の展望

今年度は森泰吉郎記念研究振興基金研究者育成費の採択を受けたことにより日本アニメ映画をほぼ網羅的に鑑賞することが出来た。もちろんこれは他のメディアと比べた際に作品の少ないアニメ映画であるために行えた試みであり、また日本国内という地理的な状況が生み出した結果でもある。修士論文執筆における射程をより広くするために海外アニメ映画にも今後は目を向ける考えもあるが、さまざまな条件上困難が予想され、また中途半端な結果に終わってしまう可能性が高い。

一方で実写映画以外のメディア研究（特にマンガ研究）に目を向けることは議論の射程を広げ、よりアニメ映画のメディア的特性を考察する際に有益である可能性が高い。本年度もマンガとアニメ映画の史的考察を中心としたメディア比較研究である『「コマ」から「フィルム」へ マンガとマンガ映画』（秋田孝宏、NTT出版、2005）を文献として参照したが、マンガ研究自体に目を向けることを考えている。